

保育士養成校におけるリカレント教育と

女性のセカンドキャリア

松山東雲短期大学 保育科

中塚良子

1.これまでの研究と本研究の目的

保育士不足と保育の質の向上が叫ばれる中、女性のセカンドキャリアとして「保育士」を選択する人が増えることで、女性の非正規雇用の減少と保育の資質向上に寄与するのではないかと考えた。昨年度は「保育を目指すきっかけ」「保育士資格の取得」に関する半構造化インタビュー（研究者が用意したいくつかの質問項目に沿って、自由に話してもらった）を行い、分析はライフストーリー法を用いた。学びの質を向上させる「問題意識」がいかんにはぐくまれたか、無意識に潜在する行動の動機や契機、社会的影響などについて、考察を行った。その結果、保育士をセカンドキャリアとして選択する時点では、保育者との出会いが大きな影響を与えている傾向があることが明らかになった。

本研究の目的は、以上のような結果を踏まえ、入学に至るまでの動機とその経緯をTEM(Trajectory Equifinality Model)を用いて分析を行う。さらに入学後の養成校における学びの中で起きた意識の変化や学びの質、卒業後の保育現場における充実感や困難感などに対する聞き取りを通して、保育士養成校におけるリカレント教育の在り方や保育の質の向上に資するものとした。さらに、これまでの研究においても対象者が語っていた「経済的な自立」についても着目し、女性がセカンドキャリアとして求人有効倍率の高い「保育士」を選択し、国家資格と安定的な収入を得ることにより、女性の非正規雇用が減少する可能性についても言及し、それら社会問題に貢献する視座を得たい。

2.研究方法

<分析方法>

TEM（複線経路・等至性モデル;Trajectory Equifinality Model）を用いて、保育士資格取得を目指し、保育士養成校に入学するまでの経路を辿る。TEMとは、年齢や月齢に囚われず、ある経験に至る経過やある経験を得た後の道筋を描くものである。TEMの分析には「等至点(EquifinalityPoint)」が設定されるが

人間の経験は例えば同じ「保育士資格を取得する」ものであっても、同じ経験（Equil）ではなく似た経験(similar)なのである。またそれと同様に、人生における毛色は様々であり、複線的である。その中において、「分岐点(Bifurcation Point)」も多様であり、それがあることによって人生の複線径路を可能にする。さらに「両極化した等至点(Polarized EFP)」は等至点を一つの者として考えるのではなく、それと対になるような補集合的な事象も等至点として研究に組み入れる必要性によって強調されている。可視化されていない両極化した等至点を組み入れることで、そこに至る仮想的な径路も書き入れることが可能になるのである。つまり、TEMは様々な可能性を含みながら人生の径路の多様性や複雑性を扱う質的研究である。(2009,サトウ)

< 研究対象者 >

- ・ 保育士資格取得を目的とし、保育士養成校に入学した女性
- ・ 他の職種において職務経験を持つ
- ・ 研究協力の承諾を得て、2 回のインタビューを行うことができる

以上すべての条件を満たした 6 名。

< 研究手順 >

研究手順は以下のとおりである。

- ① 1 人あたり 45 分から 1.5 時間程度の半構造化インタビューを行う。半構造化面接の主たる質問は
(ア) 小さい頃の将来の夢
(イ) 最初の職業選択
(ウ) 保育士資格取得の契機
である。
- ② 研究者がインタビュー内容を文字起こし、文節等を抽出し、語りの特徴をカテゴリー分けを行う。本研究ではこの時点でテキストマイニング KH-Corder を使用した。
- ③ ②をもとに、研究対象者一人ずつの TEM 図を作成し、その TEM 図をもとに 2 回目のインタビューを行い、保育に対するモチベーション、その時の感情の揺れや時系列等の誤記がないかの確認等を行う。
- ④ 個々の TEM 図を用いて、カテゴリー分けを行い、2つのカテゴリーにおいて TEM 図の統合を図る

3. 研究倫理

研究対象者に研究の目的と内容を開示した上で依頼を行い、承諾を得た人を対象にインタビューを行った。またインタビュー当日に説明書をもとに再度研究内容とインタビューの使用目的について説明を行い、インタビュー内容について、研究以外での情報を開示しないこと、必要に応じてインタビュー内容の削除を随時行うことを伝えて承認を得た。なお、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」による倫理審査(申請番号 2022-81)を得ている。

4. 研究結果

1) 保育士資格取得の動機発生とカテゴリー

インタビュー内では全ての対象者に「小さい頃の将来の夢」という質問を行った。当初から「子どもが好きだった」「保育士もしくは幼稚園、小学校の先生になりたい」と語った人と、当初は子どもとかかわる仕事を視野に入れていなかった人に分かれた。そのため、カテゴリー1を「前から保育士になりたかった」、カテゴリー2を「社会経験を心得て保育士になりたいと思った」の2つに分けて分析を行った。

2) 出発点と等至点の設定について

インタビューを通して、全員に共通していたのは高校卒業時点の人生において初めての進路選択であった。この点に関して共通している理由は、保育士養成校入学には「高卒の資格」が必須であるためである。

保育士資格取得には、保育士試験に合格して資格を得る方法と、保育士養成校に通い、単位を習得する事で資格を得る方法がある。保育士試験を通した学びも勿論重要であるし、子どもの心理や発達、保育の原理等について学ことは可能であるが、保育士養成校に通うことによって保育所だけでなく幼稚園や他の社会福祉施設、放課後児童クラブ、児童館等の現場において実習を行い、個々の社会福祉施設、または教育機関についての知識や経験を得ることが可能になる。そこで現場の教職員とのかかわりにおいて直接的な学びを得たり、保育士養成校において多くの専門的知識を持った教員、学生同士のディスカッション等を通して視野を広げたりすることが、専門性の高い保育士を養成する上で重要な役割を担っていると考えられる。そのため、本研究では、保育士養成校に入学する時点を等至点とする。

その他、TEM分析のための概念は以下のとおりである。

概念	本研究では
等至点 (EFP: Equifinality Point)	「保育士養成校に入学する」
両極化した等至点(P-EFP: Polarized Equifinality Point)	「保育士養成校に入学しない」
分岐点 (BFP: Bifurcation Point)	「最初の進路選択」「困難との出会い」 「保育への動機の発生と経済的自立」
必須通過点 (OPP: Obligatory Passage Point)	「就職する」「仕事・生活での困難にぶつかる」「保育士になる方法を検索」

3)TEM を用いた分析

図1「前から保育士になりたかった」のカテゴリーでは、自分以外の外的要因により、資格の取得を一度諦めざるを得ない状況に置かれている。その語りの中においては「ですよ、って感じで」「その時は納得して」と自身が置かれた状況を理解しつつ、進路選択において異なる道を選んだといった語りが見られた。しかし、後から「あの時リカレント制度を知っていれば」「あの時、進学可能であることを知っていれば」「高校の奨学金返済がなければ」といった語りや、モチベーションについて尋ねた時には「一番落ちていた時期」であったという語りもあり、中学・高校における進路指導時に保育士になる方法に関する案内がより多くあればといった回顧があった。

分岐点②では、就職後、仕事を覚えながらこなすことが可能であったが、困難にぶつかった部分を指す。困難にぶつかったときに、「なにやってんだろ」「目指すところが見えない」など、やりがいを感じられていないことにより、その職への意欲が低下していく。それと同時に、保育関係の人と出会うきっかけ等を通して、一度諦めていた保育士になる目標を思い出し、自ら行動することにより歩みを進めることとなる。

分岐点の③においては、経済的不安があるために、貯金が溜まってから入試を受ける、または教育訓練給付金を受けられるかどうか彼女たちの大きな課題となっており、それが不合格だった場合は、再度あきらめざるを得ない、元の職業に戻る可能性もあったと語っている。

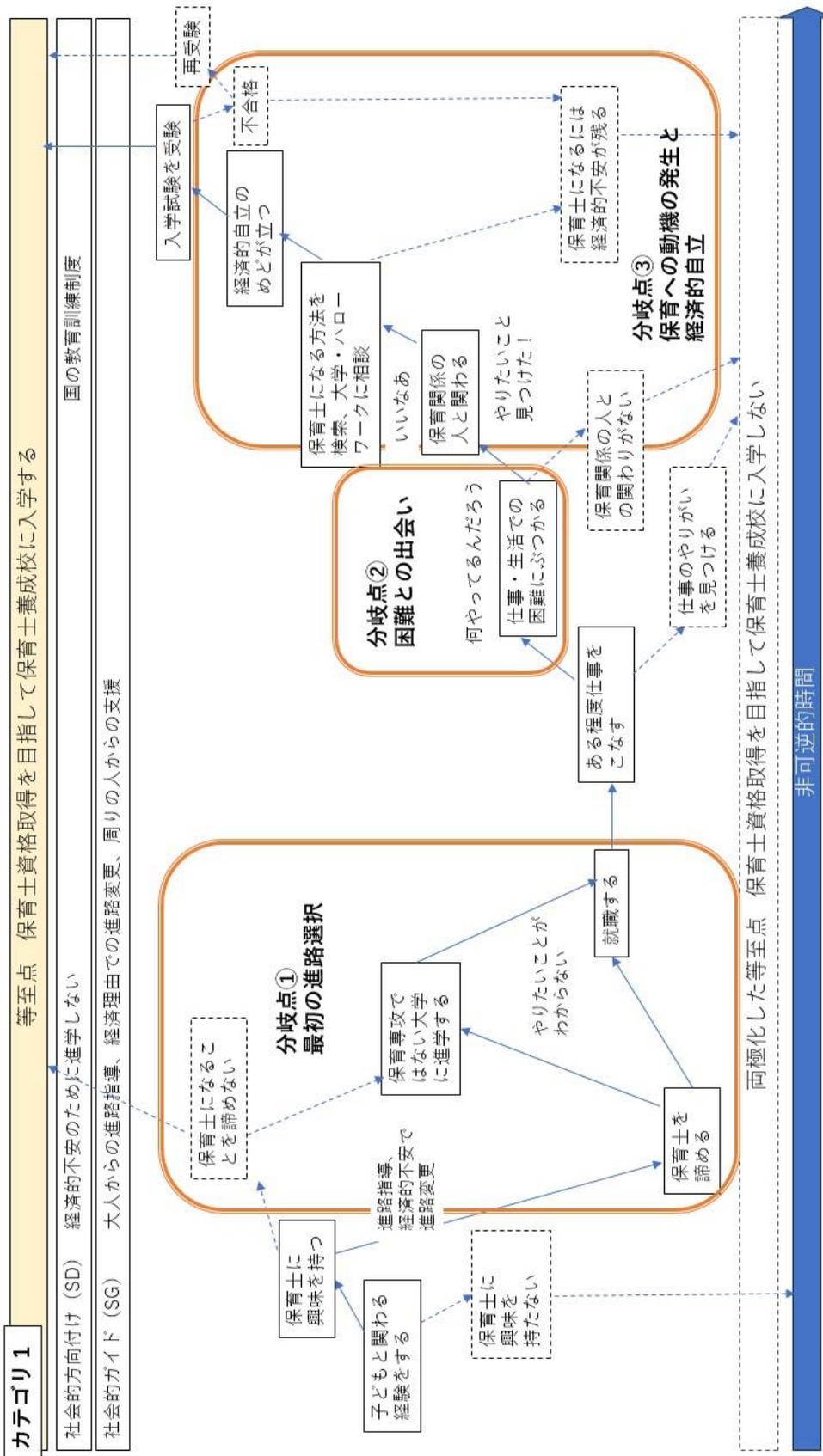


図1 カテゴリー1

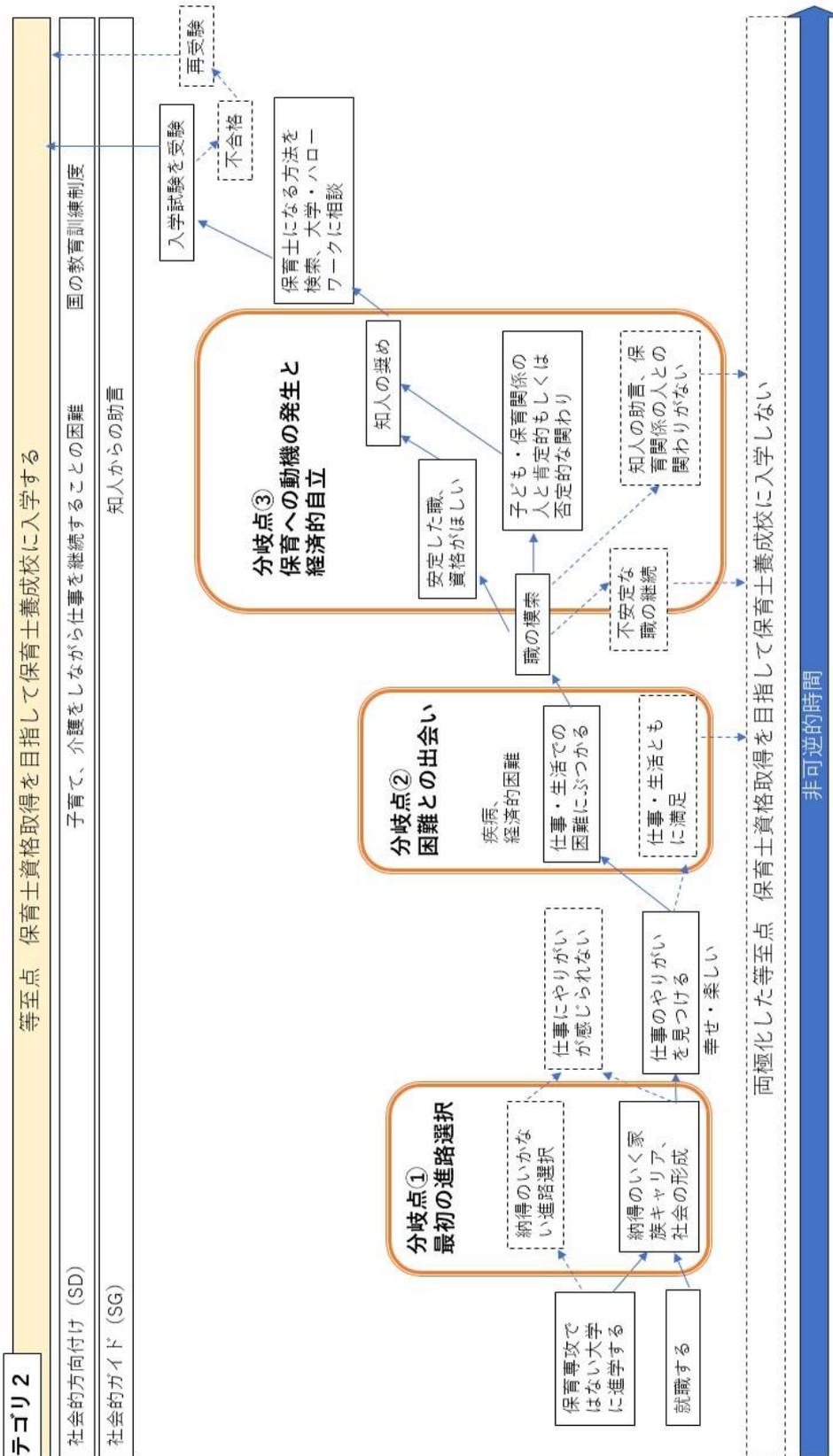


図 2 カテゴリー 2

図2に示した「社会経験を得て保育士になりたいと思った」の 카테고리では、分岐点①の第一キャリアの時点では多少の挫折を経験しつつ、やりたかったことややりたい自分などを思い描きながら、キャリア形成に納得し、「幸せ、楽しい」といった語りがあったことから、それらの状況が維持されていれば、保育士を目指すことはなかったと考えられる。

分岐点②において仕事・生活での困難においては、家族に関する出来事が、仕事に影響を及ぼし、困難をきたしている。そのような困難に直面した時に、自らの健康や家族を大切にすることによって、非正規雇用や契約社員など不安定な職への転職を余儀なくされている。その職務において、理不尽さを経験し、社会情勢に大きな影響を受ける経験をしており、保育士資格取得への強い動機である「安定した職、資格がほしい」という動機が生れている。

その他、保育に関心を持つ動機としては「社会経験の中で子どもと触れ合う機会を持った」「家族経験の中で子どもに対する興味が生まれた」「保育関係者との繋がりの中で、保育に対する興味を持った」という語りが見られた。つまり、当初は興味のなかった子どもや保育への興味は、自身の家族キャリアとそこでの経験を通して生まれたのである。

彼女たちの中には、短大や大学など高等教育機関を卒業した人もおり、保育士試験でも資格取得を目指すことが可能であったが、まったく未知の学問領域について一人で膨大な勉強をすることへのハードルの高さと、知人の助言（「子どもとかかわるのは素敵なこと」「保育士楽しいよ」等）により、保育士養成校に入学することを選択したと述べている人がいる。また、経済的な緊急性に関する語りはカテゴリー1に比べて少なかったが、実際には保育士修学支援のための奨学金を使用するなど、決して余裕がある訳ではない。しかし、例え入試で合格しなかったとしても再度受験し、あきらめることはなかったとも語っている。

必須通過点である「保育士になる方法を検索」においては、カテゴリー1, 2双方において「高卒で保育士になる方法」といった検索によって、初めて保育士になる方法を知り、各大学の案内にあるリカレント学生の記事を見て保育士養成校に挑戦する意欲が湧いたという語りがあった。さらに、経済的不安から保育士を諦めた人は「保育士 奨学金 給付金」という検索をかけたものの、保育士資格取得のための職業訓練にたどり着くまでに多くの時間を要したことを述べていた。養成校・ハローワークへの相談については、ほとんどが平日の昼間にいかなくてはならず、有給を消化しながら相談に通ったことも困難の一つとしてあげられていた。

5. 考察と今後の課題

今回のインタビューにおいて、カテゴリ1の「前から保育士になりたかった」と語った女性は、子どもと関わる経験を最初の進路選択以前にもっており、そこでの肯定的・衝撃的な経験が保育士への動機へとつながっている。経験の場として挙げられたのは、中学校の職場体験、幼稚園児と身近にかかわる環境、地域イベント、習い事等である。

また彼女たちの特徴として、保育士養成校への進学を断念した理由として最初の進路選択における進路指導で反対されたこと、経済的不安をあげており、その不安は進学時点での不安と保育士が得られる生涯年収への不安の双方が語られた。

保育所保育指針において質の高い保育の実践、保育士の専門性の向上が強調されているが、子どもや保育に対する肯定的な思いを持っていながら、進路指導や経済的不安から保育士への道が閉ざされることは、保育業界全体の資質向上を考えたときに大きな損失であり、キャリア教育や家庭の経済状況がいかに関与するかの10代の進路選択に影響を与えるかを考慮し、社会的な保障の必要性を強調する必要がある。

一方でカテゴリ2の「社会経験を心得て保育士になりたいと思った」女性たちは、カテゴリ1に対して、進路選択以前には子どもとのかかわりに関する語りが無かった。つまり、分岐点①「最初の進路選択」において、保育士になりたいという意思を持つ条件として、日常的に子どもと関わる経験が必要であること、さらには子どもと関わる経験において、どのような印象を持つかということが重要なのである。先述のキャリア教育という視点において、その時点においてどのような職を希望するかを別にし、小さい子どもと触れ合う機会が日常的に身近にあることによって、保育や子どもに対して興味を持つ機会を増やすことができ、保育士を目指す人の裾野を広げることができる。

さらに、カテゴリ2の分岐点①②で注目すべき点は、女性のキャリア形成の中で、子育て・介護をすることで生じる時間的拘束や労働形態、雇用主の理解が大きく彼女たちのキャリア選択に影響を及ぼしている点である。この事実は女性のライフコース研究においてもすでに言われていることであるが、今回のインタビューによって、そのような状況に置かれた女性は、契約社員や非正規雇用など不安定な職に就くことを選択せざるを得ないことが明らかになり、その結果、「安定した資格、職」を求めることとなっている。

しかしながら、この介護・子育てによるネガティブな社会からの圧力は、保育士資格を取得できたからといって解消するわけではない。予備的に、昨年度のインタビュー対象者、卒業生にもインタビューを行ったところ、保育士資格取得したとしても、自立できるだけの給与を得ること、理想とする保育を行うこと、子育てと時間的拘束に対する理解も

しくは時間的余裕を確保できる社会的資源や職場環境がないといった問題が浮上した。つまり、資格を取得したにもかかわらず、それらのことによって、さらに彼女たちを苦しめることになっていたのである。

現行の職業訓練制度や、保育士修学支援奨学金制度においては、その自治体での就職と継続勤務や正規職員としての就職が必須条件となっているため、その様な苦しい環境での仕事継続を強いられることになる。そのため彼女たちは、保育士に対してよりポジティブな印象をもって資格取得を目指したにもかかわらず、結果的に保育士という仕事に失望することになるのである。例えば、それらの縛りがなく養成校を卒業し進路選択をする学生たちでさえ、より給与が高く、待遇の良い保育現場を探そうとすると、県外都市部の給与・待遇の良さが目につき県外に出ることを選択、または、県外に出ることができない人は、薄給や待遇の悪さによって就職後に保育の道を断念する事例も後を絶たない。現行の奨学金制度や職業訓練制度を最大限に活かし、彼女たちの保育に対するモチベーションを維持もしくは向上させるためには、保育現場の職場環境、理想の保育を行うための柔軟さが必須である。

最後に、TEMの分析には用いなかったが、保育士養成校に入学以前に思い描いていた学びの分野と入学後に学びたい分野について質問を行ったところ、入学以前には自身の経験から問題意識や課題意識を形成していたため、それぞれの経験にもとづいた分野について語っていたが、保育現場における実習後の語りでは、子ども集団に関する学びや子どもの発達に関する知識と経験、発達支援や社会的養護、障害者支援等、養成校における講義科目とリンクした分野に関する語りが増加した。インタビュー対象者全員が、保育士養成校に入学する以前に子どもと関わる経験をもっているが、保育士養成校における講義科目と保育現場における実習を経て、保育士資格取得を目指すことによって、理論と実践を結び付けながら視野を広げていく事ができることが示唆された。

参考文献

1. 安田裕子・サトウタツヤ(2016)『TEMでわかる人生の経路 質的研究の新展開』誠信書房
2. 樋口美雄・田中慶子・中山真緒(2023)『日本女性のライフコース』慶応義塾大学出版会
3. 牛澤賢二(2022)『やってみよう テキストマイニング』朝倉書店
4. サトウタツヤ(2023)『TEMではじめる質的研究 一時間とプロセスを扱う研究をめざして一』誠信書房
5. 安田裕子・サトウタツヤ(2022)『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述』誠信書房
6. 安田裕子

7. サトウタツヤ(2017)『TEM でひろがる社会実装 ライフの充実を支援する』誠信書房

謝辞

今回の研究に際し、愛媛労働局、ポリテクセンター愛媛、ハローワークの方々より基礎調査に関して厚いご協力を賜りました。日々の業務等でお忙しい中、資料のご提供や職業訓練に関する調査についてご尽力いただき、心より感謝を申し上げます。

また、松山東雲短期大学桐木陽子先生、臨床発達心理師高本恵氏より、研究に対するご助言を賜りました。誠にありがとうございました。